

次世代人文学開発センター

◇教員◇

〔文化交流学部門〕

- 教 授 小島毅、芳賀京子
准 教 授 松田陽（兼務）
助 教 張博（地域連携担当）
特任助教 李貞善（尊厳学担当）

〔国際人文学部門〕

- 教 授 鎌田美千子、鈴木淳（兼務）、納富信留（兼務）
助 教 吉田（入里）夏美（留学生特別講座プログラム担当）、
笠原真理子（ヒューマニティーズ・リエゾン担当）、
ニーナ・ハビャン・ビジャレアル（大江文庫担当）、
朴燦鎬（情報メディア室担当）

特任助教 加藤靖子（東京大学百五十年史編纂担当）

〔人文情報学部門〕

- 教 授 中村雄祐（兼務）、小林正人（兼務）、高橋晃一（兼務）、
高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）
准 教 授 大向一輝
講 師 塚越柚季
助 教 小川潤

（1）次世代人文学開発センターについて

本センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行っている。センターに籍を置く学生はいないが、授業や論文指導等を通じて教育も担当している。

センターの前身は、昭和41年度に創設された文化交流研究施設で、地域間の文化の交流や複数の文化領域にわたる総合的な研究を行うことを目的としていた。その後、平成5年度に朝鮮文化部門、平成6年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、従来の組織である基礎理論部門とともに、3部門からなる研究組織になった。平成14年度には朝鮮文化部門が韓国朝鮮文化研究専攻として独立し、同年7月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設された。平成17年度からは組織名を現在のセンターの名称とし、その下に従来の基礎理論部門を継承した先端構想部門のほか、創成部門、萌芽部門を置いた。創成部門の死生学拠点（平成24年度に死生学・応用倫理センターとして独立）、萌芽部門のデータベース拠点・大蔵経（のち創成部門、現在の人文情報学部門）のような、現在にまで続く研究拠点がここから生み出されている。平成30年度、センターの3部門は文化交流学部門、国際人文学部門、人文情報学部門に改組され、現在

に至る。令和4年度には、センター内に「人文学応用連携推進室」が設置された。

（2）次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、学内の独立した附置研究所とは異なり、人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。センター長は、研究科長が兼任する。専任の基幹教員に加えて、個別のプロジェクトを推進する兼務の流動教員を、人文社会系研究科の研究室から受け入れている。

「文化交流学部門」:

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行いつつ、それらを公開発信していくことを目的とする。前身である文化交流研究施設や先端構想部門には、専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。歴代主任には、旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、古代ローマ美術史・考古学の青柳正規教授、西洋中世史の高山博教授、西洋美術史の小佐野重利教授らがいる。平成27～29年度には集英社高度教養寄付講座、平成27～令和2年度には東京大学ビジョン2020推進事業「Sustainabilityと人文知」研究プロジェクトが置かれた。令和3年度以降は地域連携プロジェクトの本部も兼ねる。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に応じて専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や、文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

「国際人文学部門」:

留学生教育や国際交流、後期教養教育、各種プロジェクトへの参画を通して人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から来た留学生が数多く在籍している。勉学及び研究に必要な高度な日本語運用能力の習得に向けて日本語及び日本文化の教授法開発を行うとともに、帰国後に大学教員を目指す留学生や将来日本語教員を目指す学生のニーズに応じて日本語教師教育に関する研究も進めている。教育面では、学生が日本語教授法とその関連分野の知見を考究する場として「文化交流演習」を開講している。

加えて、百五十年史編纂、ヒューマニティーズ・リエゾン、大江健三郎文庫のプロジェクトにも参画し、かつ国際人文学プロジェクトを推進している。

「人文情報学部門」:

人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学 (Digital Humanities) として目指している。

平成20年4月に、当時の萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の本格的模索がなされた。このうち前者は「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成25年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門に移行した。平成30年度の改組に伴い、拠点の名称を部門名とするようになった。

(3) 教員について

「文化交流学部門」:

本部門の専任教員は、小島毅教授、芳賀京子教授、張博助教である。小島教授は東アジア海域の思想文化交流を専門とし、芳賀教授は地中海域の形象文化交流を専門としている。張助教は日本中世文学を専門とし、地域連携プロジェクトを担当する。李特任助教は科学研究費学術変革領域「尊厳学の確立」の運営を担当する。また、兼務教員として松田准教授 (文化資源学) が所属し、「鳥取県淀江町一帯を含む考古学的・文化資源的研究の支援プロジェクト」を担当している。

「国際人文学部門」:

本部門の専任教員は、鎌田美千子教授、吉田 (入里) 夏美助教、笠原真理子助教、ニーナ・ハビャン・ビジャレアル助教、朴燦鎬助教、加藤靖子特任助教である。鎌田教授は日本語教授法開発と日本語教師教育を専門とし、人文社会学系研究科・文学部日本語教室室長を務めている。吉田助教は留学生特別講座プログラム (通称「留学生のための特別講座」) を担当している。笠原助教はヒューマニティーズ・リエゾンとの研究連携を担当している。ビジャレアル助教は大江文庫の運営を担当している。朴助教は情報メディア室の運営を担当している。加藤特任助教は東京大学百五十年史編纂を担当している。兼務教員として鈴木淳教授 (日本史学) が東京大学百五十年史編纂を、納富信留教授 (哲学) が国際人文学プロジェクトを担当している。

「人文情報学部門」:

本部門の専任教員は大向一輝准教授、塚越柚季講師、小川潤助教である。兼務教員としては、中村雄祐教授 (文化資源学)、小林正人教授 (言語学)、高橋典幸教授 (日本史学)、高岸輝教授 (美術史学)、高橋晃一教授 (インド哲学仏教学) が所属している。

(4) 授業について

「文化交流学部門」:

文化交流学部門は、共通講義として「**文化交流特殊講義**」「**文化交流演習**」を開講している。令和8年度は、小島毅教授が東アジア思想文化史、芳賀京子教授が古代地中海美術史、非常勤の新居洋子講師が中国とヨーロッパの文化交渉史、奈良澤由美講師が地中海域の装飾史、中村のい講師が古代ギリシア美術史、中西啓太講師が日本近代史について開講している。

「国際人文学部門」:

国際人文学部門では、「**文化交流演習**」を開講し、日本語教授法に関する授業を行っている。令和8年度は、鎌田美千子教授による「文化交流演習V」（日本語教育学概説）、「文化交流演習VI」（日本語教育学演習）を開講している。

「人文情報学部門」:

人文情報学部門が開講する科目は「**人文情報学概論**」「**人文情報学特殊講義**」で、「人文学フロンティア教育プログラム」に位置づけられ、文学部の各専攻の壁を横断し、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論」は全学大学院に向けて発信されるデジタル・ヒューマニティーズ教育プログラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。令和8年度は大向一輝准教授、塚越柚季講師、小川潤助教による「人文情報学概論I」「人文情報学概論II」のほか、「人文情報学特殊講義研究」I～IVが専任および兼務教員、非常勤講師により開講されている。

文学部の扉 ポスターアーカイブ



「東大が掘る、東大を掘る」

イタリア、ナポリ近郊のソルマ・ヴェスヴィアーナにおける古代ローマ遺跡／東京大学本郷キャンパスにおける加賀藩前田家江戸藩邸の発掘

主催：東京大学文学部・人文社会系研究科

共催：東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター

協力：東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究

期間：2026. 1. 20～2. 19